

小学校家庭科衣服領域の学習内容における中学生・高校生の定着状況

三輪聖子

岐阜女子大学家政学部生活科学科

(2018年1月31日受理)

Fixation of Junior and Senior High School Students in The Learning Content of Home Economics Clothing Area of Elementary School

Department of Home and Life Science, Major in Home and Life Science,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

MIWA Satoko

(Received January 31, 2018)

要旨

本研究は、小学校で学んだ衣服領域の基礎的知識・技術がどの程度身に付いているのかを明らかにし、高校家庭科ではほとんど実践されていない衣服製作のあり方を考える手がかりとしたい。中学生・高校生に質問紙調査を実施した結果、小学校で学んだ基礎的知識・技術はあまり定着しているとはいえなかった。高校生に比べ中学生の方が身に付いている項目もある。高校生の正解率が高い項目は、高校でも学んでいると考えられるものであった。つまり生活系高校生は現在も学んでいることから身に付いている項目が多く、正解の割合も高い。つまり知識と技術を定着させるには、繰り返し学ばせることが重要であり、高校においても被服製作に携わる内容を組み入れる必要があるとわかった。

キーワード: 小学校家庭科(home economics elementary school) 衣服領域(clothing area) 知識と技術(knowledge and technique) 被服製作(clothing composition practice)

1. 目的

家庭科教育は、小学校5・6年生の「家庭科」から始まり、中学校の「技術・家庭」(家庭分野)、そして高校の必修科目として「家庭基礎」「家庭総合」「生活デザイン」から1科目を選択して学ぶことになっている。ただし「生活デザイン」は、平成29年3月公示の新学習指導要領によると削除されることが

決定している。基本的には、小学校、中学校、高校へと発達段階に沿った教育内容が組み込まれていく。

家庭科教育の特徴として実践的・体験的に学ぶ教科の色彩が強い。例えば衣食住の領域では、日常着の着方と洗濯や布を用いた物作りとしての裁縫、毎日の食生活に関わる栄養・調理、住まいの掃除・整理整頓など日常

生活に必要な知識・技術を身につけ、そして生活を快適により良くしようとする実践的な態度を育てることが目標となっている。

食領域の調理は、毎日朝・昼・晩と食事をしており、外食や弁当・お惣菜を購入することはあっても何らかの調理は行っていると考えられる。しかし、衣領域の裁縫は、日常生活において針と糸を用い縫うことをどの程度行っているだろうか。取れたボタンを付ける程度で、ほとんど使う機会がないのではないかと考える。つまり、活用しなければ学んでも忘れてしまい、技術の上達はない。田中・内田の調査(2010)によれば「衣領域では学校種が上がるにつれて定着度は低下する」¹⁾という研究結果も出ている。

本研究では、小学校で学ぶことになっている衣服領域の知識と技術について中学生と高校生がどの程度身に付けているのかを明らかにしたいと考えた。小学校の家庭科目標には「日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける」ということが掲げられており、これを踏まえて中学校・高校の家庭科がある。学校種が上がるにつれ知識・技術は身に付いていくはずである。衣服領域の基礎的知識と技術がどの程度身に付いているのか明らかにし、高校家庭科ではほとんど実践されていない衣服製作のあり方を考える手がかりとすることを目的とする。

2. 方法

平成 20 年 3 月公示の家庭科学習指導要領の衣服領域に関する内容について 33 項目をあげ、生徒の実態を把握するために、質問紙調査を実施し、集計・分析を行った。本研究では、そのうち小学校の学習内容 13 項目を中心に分析を行う。調査対象者は各校種の最終学年に当たる岐阜県内の中学 3 年生 142 名(男子 75 名, 女子 67 名), 高校 3 年生 99 名(普

通科 27 名(男子 6 名, 女子 21 名), 生活系の学科 72 名(男子 4 名, 女子 68 名)), 合計 241 名とする。但し、高校生の人数が非常に少なく正確なデータとはいいいにくく参考として扱う。調査時期は、平成 27 年の 9 月～10 月である。

3. 小学校家庭科衣服領域の学習内容と質問項目

「小学校家庭科学習指導要領(平成 20 年)」²⁾の内容は、「A 家庭生活と家族」, 「B 日常の食事と調理の基礎」, 「C 快適な衣服と住まい」, 「D 身近な消費生活と環境」の 4 つに分類されている。この分類は、そのまま中学校「技術・家庭」(家庭分野)の内容へ移行されている。

この「C 快適な衣服と住まい」の(1)衣服の着用と手入れ ア衣服の働きと快適な着方の工夫 イ日常着の手入れとボタン付け及び洗濯 (3)生活に役立つ物の製作 ア形などの工夫と製作計画 イ手縫いやミシン縫いによる製作・活用 ウ用具の安全な取扱い、から必要と思われる知識を選択して①～⑬の質問を行った。

①箱カバーの布の形は、「(3)ア布を用いて製作するものを考え、形などを工夫し製作計画を立てること」にあたる。箱の展開図形がわかり、製作のための布の形を尋ねている。

②③④は「(1)ア日常着の快適な着方を工夫できる」にあたり、学習指導要領の具体的事例に「布を用いた実験を行ってみたりする」とある。つまり②は布の性質を実験から理解し、③肌着のシャツに合う布を選択する。これらを学び④Tシャツを選ぶとき最も重視する点を尋ねている。

⑤⑥⑦⑧⑨は「(3)ア布を用いて製作するものを考える」の布の名称や特徴、そして製作する時の布地の使い方を尋ねたものである。

⑤ほつれない部分，⑥布端の名称，⑦布の強さ，⑧布の伸びるところ，⑨トートバッグの布地の使い方を問うている。

⑩⑪は「(3)イ目的に応じた縫い方を考える」にあたり，⑩縫い方，⑪布にあった針について尋ねている。

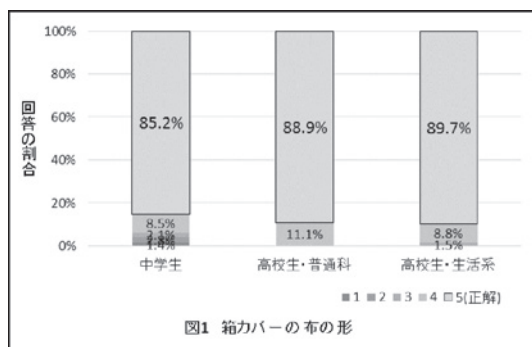
⑫⑬は「(3)ウ製作に必要な用具の安全な取扱い」にあたり，⑫まち針の打ち方，⑬指ぬきの使い方を問うている。

4. 結果と考察

①箱カバーの布の形

箱カバーを作る時，どのような形の布が必要かを尋ねている。正解は「5」である。(図1)

これは図形の問題である。中学生 85.2%，高校生・普通科 88.9%，高校生・生活系 89.7%の正解率であった。中学生，高校生ともに差はみられない。90%近くの生徒が理解していることがわかった。

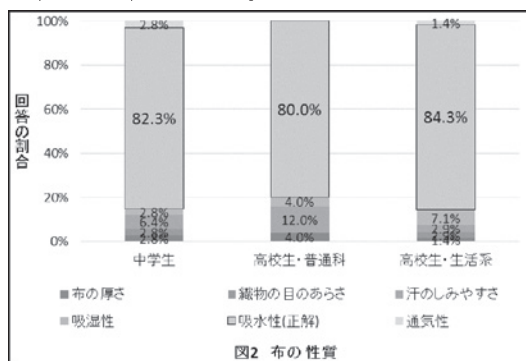


②布の性質

5種類の同じ長さ・幅の布を同じ分量だけ同時に水につけ，2～3分後の状態を絵で示し何の実験かを尋ねている。正解は「吸水性」である。(図2)

これは吸水実験であり，中学校でも学んでいるものである。中学生 82.3%，高校生・普通科 80.0%，高校生・生活系 84.3%の正解率

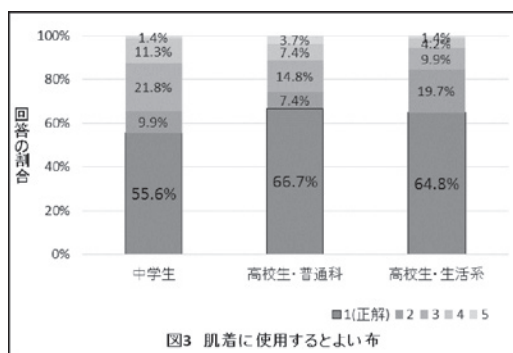
であり，中学生と高校生の差はない。80%の生徒が理解していた。



③肌着に使用するとよい布

②の実験結果からシャツに使用するとよい布を選択させるものである。正解は吸水性の良い「1」である。(図3)

中学生が 55.6%，高校生が約 65%前後と高校生の正解率が中学生より 10%ほど高かった。概ね理解されていると思われるが，30～40%は肌着に使用する布の特徴を理解していないことがわかった。

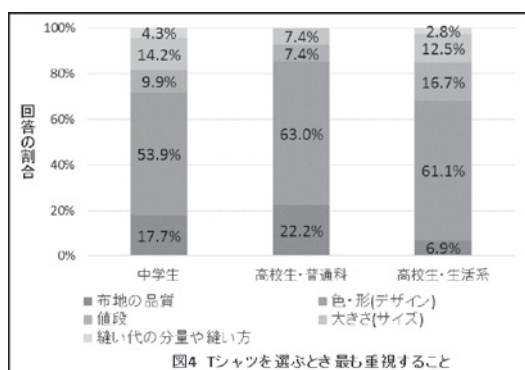


④Tシャツを選ぶ時最も重視すること

Tシャツを選択するとき最も重視すること何かを尋ねている。(図4)

特に正解はない。1位は中学生・高校生ともに半数以上が「色・形(デザイン)」を選択しており最も重視していた。2位は「布地の品質」を中学生 17.7%と高校生・普

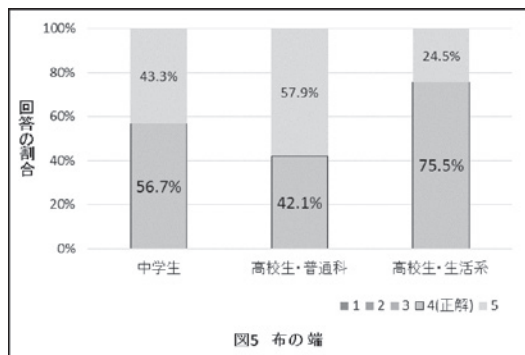
通科 22.2%が選択していた。見た目の良さを重視する傾向がある。しかし、高校生・生活系の2位は「縫い代の分量や縫い方」16.7%であった。専門的に学んでいることから、見た目だけではなく縫い方等も確認して選んでいることがわかった。



⑤布の端

巻いた布の端の図を示し、縦と横の端のどちらがほつれないようになっているかを尋ねている。正解は「4(縦)」である。(図5)

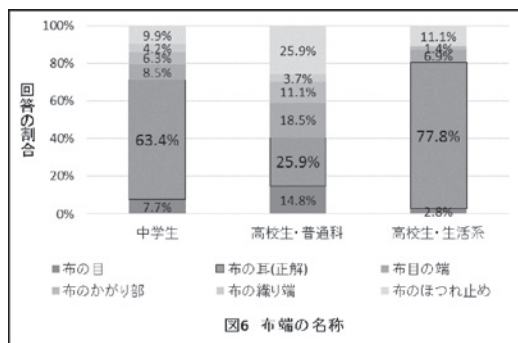
中学生は56.7%、高校生・普通科42.1%、高校生・生活系75.5%と高校生・普通科の正解率が最も低かった。中学校でも学ぶ内容であるため中学生は半数が理解していた。高校性・生活系は正解率が75%以上とかなり高く、専門的に学んでいるからだと考えられる。



⑥布の端の名称

⑤のほつれない端の名前を尋ねている。正解は「布の耳」である。(図6)

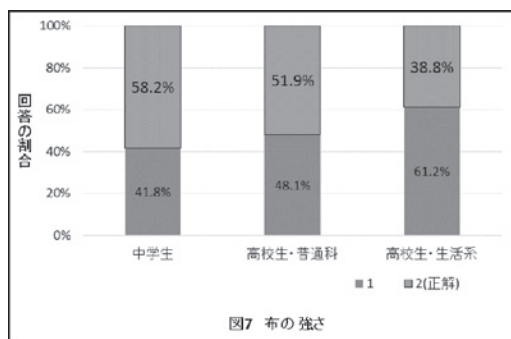
これも⑤同様、中学校でも学んでいるため、中学生63.4%と正解率は高かった。高校生・生活系は77.8%の正解率であった。やはり、生活系は専門的に学んでいるからだと考えられる。高校生・普通科の正解が25.9%と非常に低く、小・中学校で学んだことが定着していないと考えられる。



⑦布の強さ

⑤の巻いた布の端の図から、布の横と縦の強さを尋ねている。正解は「2(縦)」である。(図7)

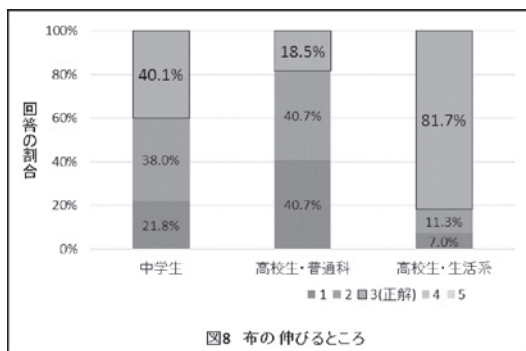
「布端の名称」とは異なり、今度は高校生・生活系科が38.8%と、専門的に学んでいるにもかかわらず最も正解率が低かった。中学生は58.2%と最も高くなっていた。これは中学校でも学んでいるからだと考えられる。



⑧布の伸びるところ

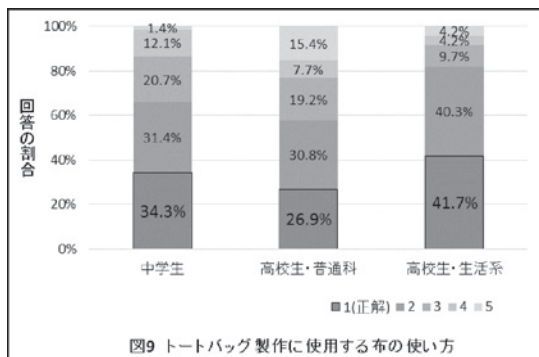
布の横・縦・斜めでどの方向に引っ張ると最も伸びるかを回答するものである。正解は「3(斜め)」である。(図8)

中学生は 40.1%の正解率であった。高校生・生活系は 81.7%と正解率は非常に高かった。やはり、現在も学んでいるため、定着していると考えられる。それに対し高校生・普通科の正解者は 18.5%と極端に低かった。高校生・普通科では、布に触れる機会は少なく、小学校・中学校で学んでも忘れてしまっており、定着はしていないことがわかった。



⑨ トートバッグ製作に使用する布の使い方

トートバッグを製作する時に一番丈夫な布の使い方を尋ねている。正解は「1」である。
(図9)



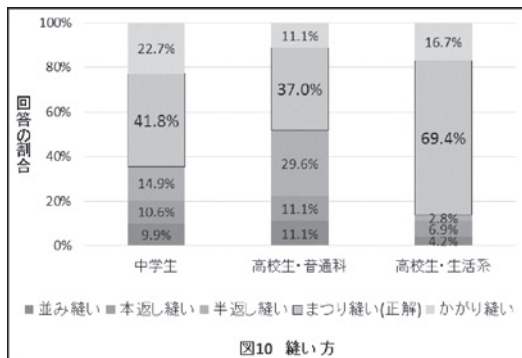
中学生は 34.3%，高校生・普通科は 26.9%であった。⑧布の伸びについて高校生・普通

科の正解率が最も低かったので、それと同様の結果であると考えられる。しかし、高校生・生活系の正解率も 41.7%とあまり高くなく、⑧布の伸びの正解率の半数ほどしか正解していないことになる。

⑩縫い方

まつり縫いの絵を見せ、縫い方を尋ねている。正解は「まつり縫い」である。(図 10)

中学生は**41.8%**が正解していた。高校生は、生活系**69.4%**と正解率は高かった。それに比べ普通科は**37.0%**と低くなっていた。生活系は縫う技術として現在使用しているからだと考えられる。「まつり縫い」は、中学校で学ぶ内容であり、もう少し中学生の正解率が高くないといけないのではないかと考える。現在学んだことも**4割**しか定着していないことがわかった。

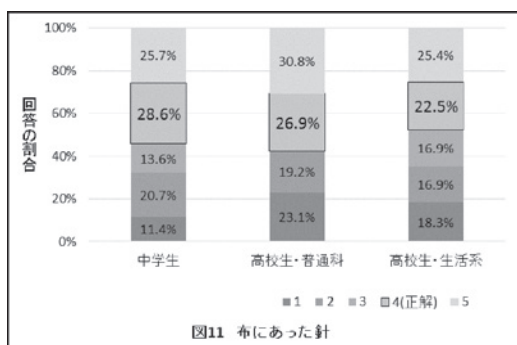


⑪布にあった針

ミシン針について番号 9・11・14 号と太さの関係を探ねたものである。正解は「4」である。(図 11)

中学生は 28.6%の正解率であった。高校生・生活系の正解率が 22.5%と最も低かった。生活系はミシンの使用頻度が比較的高いと考えられるが、針はミシンに取り付けられているため、太さとの関係を意識していないのかもしれない。一般的に目方でミシンを使

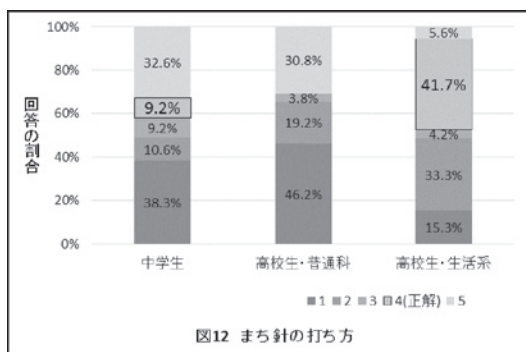
用することはほとんどないため、知識として定着している人は2割程度であることがわかった。



⑫まち針の打ち方

5種類のまち針の打ち方を図で示し、正しい打ち方を選択してもらうものである。正解は「4」である。(図12)

中学生は正解率が9.2%であった。まち針の打ち方は小学校で学ぶ内容であるが、ほとんど定着していない。高校生は、普通科の正解者が0人であった。生活系は、授業でまち針を使用していると考えられるが、41.7%であった。小学校で学んだことがまったく定着していないと言っていい。あるいは、小学校で指導されていない可能性もある。

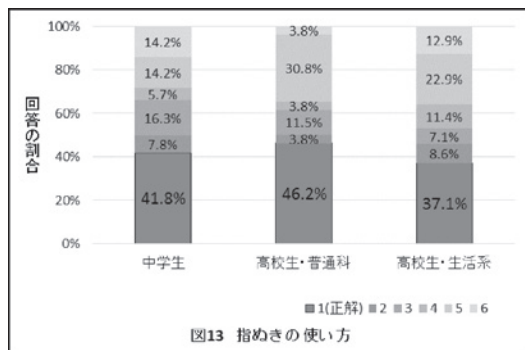


⑬指ぬきの使い方

短針用・長針用の指ぬきをはめた図を示し、正しいものを選択してもらうものである。正

解は「1」である。(図13)

中学生41.8%、高校生・普通科46.2%、高校生・生活系37.1%の正解率であった。なぜか高校生・生活系の正解率が最も低かった。指ぬきの使い方は、小学校で学ぶ内容である。知識として知っていても日常で使用するのではない。小学校の教科書には、写真入りで説明がされているため、覚えていた可能性もある。使い方は知っていても実際に活用していなければ使うことは難しい。



以上の結果から、小学校・中学校で学んだ知識・技術が定着しているとはいえない。小学校で学んだ基礎に、中学校・高校でさらに積み上げて学んだことは定着しているが、小学校のみや中学校で終わってしまった内容は、高校ではほとんど定着していないことがわかった。

5. まとめ

本調査から、中・高生が衣服領域の基礎的知識と技術をどの程度身に付けているのかわからかにすることを目的とした。調査結果をまとめると次のようなことが明らかになった。

1)中・高生共に「箱カバーの布の形」「布の性質」は正解率80%以上とよく理解していることがわかった。「肌着に使用するとよい布」は60%前後の正解率でおおむね理解しているが、30~40%は肌着に使用する布の特徴を理解していないことがわかった。

2) Tシャツを選択する時、最も重視する点は「色・形(デザイン)」の見た目であった。

3) 「布の端」「布の端の名称」「布の伸びるところ」「縫い方」は高校生・生活系が、70～80%の正解率で最も高く、専門的に学んでいることにより身に付いていると考えられる。これらの内容は中学校でも学んでおり、項目にばらつきはあるものの中学生はおよそ半数が理解していた。

4) 「布の強さ」「布にあった針」「指ぬきの使い方」は、高校生・生活系の正解率が最も低かった。日常的に触れることの少なさが影響しているのかもしれない。

5) 「まち針の打ち方」は高校生・生活系の4割しか身に付いていなかった。

6) 高校生・普通科は、中学生よりも正解率が低い項目が多かった。

以上のように、小学校・中学校で学んだ基礎的知識・技術はあまり定着しているとはいえない。また、中学生の方が身に付いている項目もあれば、高校生の方が身につけている項目もある。高校生の正解率が高いものは、高校でも学んでいると考えられる。つまり生活系の高校生は現在も学んでいることから身に付いている項目が多く、正解の割合も高い。被服領域に関する知識と技術を定着させるには、繰り返し学ばせることが重要であり、高校においても製作に携わる内容を組み入れる必要があるとわかった。

参考文献

1) 田中志穂, 内田恵美子:家庭科学習の定着度, 教育実践総合研究センター研究紀要, 19, 53・59 (2010)

2) 文部科学省:小学校学習指導要領 家庭編 平成20年8月, 教育図書, (2008)